

# 北海道渡島支庁八雲町遊楽部川支流トワルベツ川 流域字富咲沢地帯の地すべり調査報告\*

橋場 善也\*\* 嶺脇 実\*\*  
本間 英作\*\*\* 星野 祖\*\*\* 高谷 喜一\*\*\*

550.342

## § 1. は し が き

昭和42年6月26日付北海道新聞(朝刊)に「渡島管内八雲町の奥地の沢で突然土地が約50メートルの高さに隆起して沢を埋める“新山”出現」という記事が掲載された。この状況を調査するため6月27日現地に出張した。その結果大規模な地すべりによる現象であることがわかった。

## § 2. 地すべりの位置と付近の状況

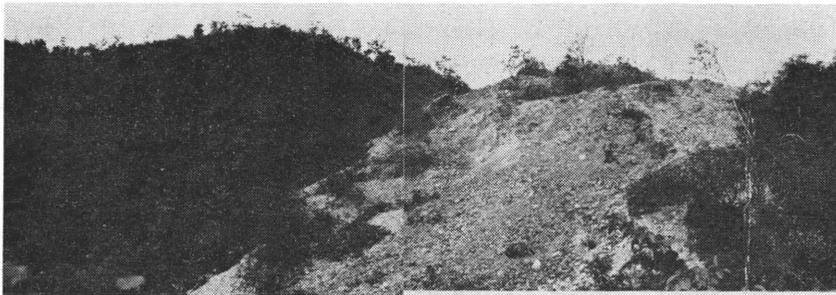


写真1 第3図のA地点より北西に向かって写す左側の山は、沢下で樹木におおわれ、泥岩堆積の成因ならしめた山である。



写真2 第3図のD地点より東南に向かって写す。

第1図に示すように、渡島管内の噴火湾に面した八雲町市街地から北西約13kmにある大関小中学校からさらに約3.2kmはいった遊楽部川支流トワルベツ川流域字富咲沢地帯沢下の地藏橋から沢奥約1kmの地点で、地すべりの規模は面積約0.15km<sup>2</sup>と推測された。

第2図は、地すべりのあった付近の略図で、山稜は標高100~200mで、この付近一帯の地質は新第3紀八雲層(砂岩、泥岩)の互層である。付近には過去において地すべりがあったと思われる地形がところどころに見られる。

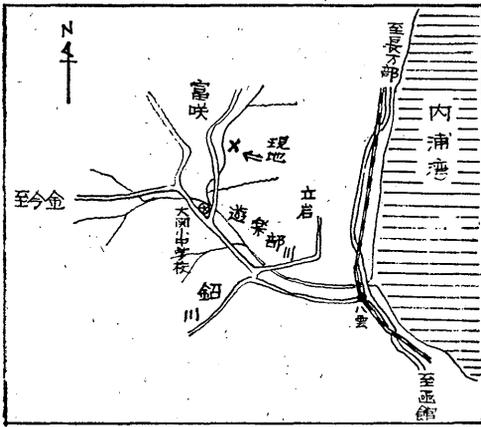
\* Z. Hashiba, M. Minewaki, E. Honma, S. Hoshino, K. Takaya; Landslide of Yakumo-machi, Oshima-shichyo, Hokkaido. (Received Sept. 8, 1967)

\*\* 函館海洋気象台

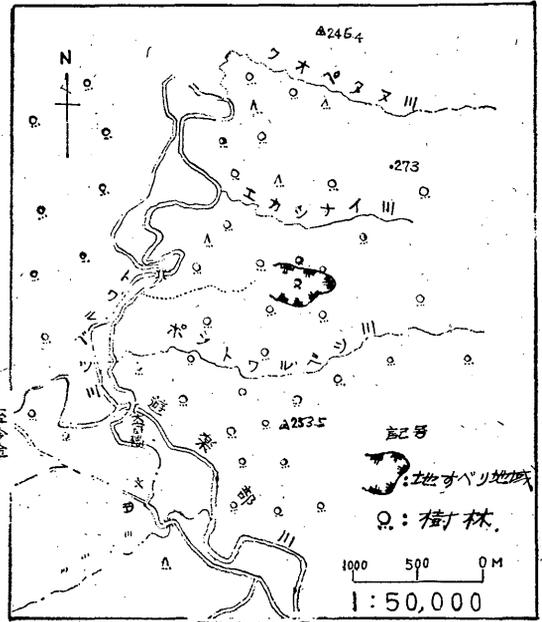
\*\*\* 森測候所

## § 3. 地すべり地の状況

地形は約20度勾配で、奥行約400m、幅約200mの斜面で、周囲一帯は樹木が茂っており丘陵にかこまれている。地すべりはこの斜面のほとんど大部分にわたって起きている。



第1図 八雲奥地の位置図



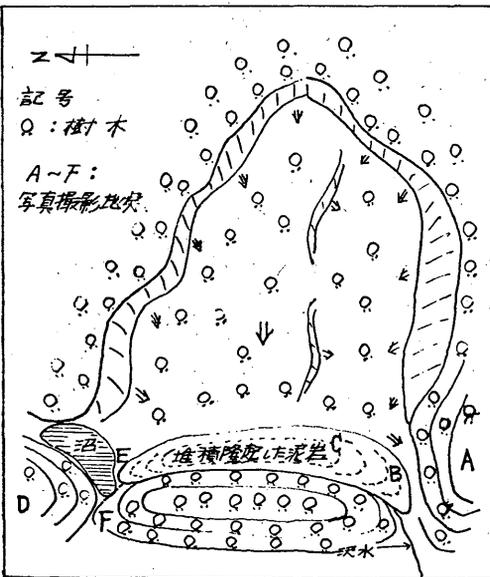
第2図 地すべり付近の略図

第3図は、現地の見取図であるが、斜線でかこまれた部分が地すべりを起こし、沢に向かって移動し、その先端が反対側の丘陵に衝突して盛り上がり、逆船底型の山をつくったものと思われる。盛りあがった部分は泥岩で、大小さまざまな粘板岩状の岩石におおわれている。

地すべり地域の大部分では樹木はほとんど倒伏してお

らず下方だけが倒伏しているものが多いところから沢一帯が陥没したように見える。盛りあがった部分は南北約200m、東西約50m、高さ約50mの山になり、せきとめられた沢水が広さ約300m<sup>2</sup>、深さ1~2mの沼になっている。

地すべりのあったのは奥地で、人も住んでおらずいつごろ発生したものかわからないが、現地調査の際近くの人から聞いたところによると、「4月下旬の夜半約4km離れた字立岩部落で一瞬「ドドーン」というにぶい音とともに家屋がゆれたことがあった。」また、「大関小中学校周辺でも同じ頃の夜半「ドドーン」と地ひびきとともに家屋がゆれ震度Ⅱくらいに感じた。」ということであった。ただし、これが今回の地すべりに直接関係があるかどうか、はっきりしたことはわからない。



第3図 地すべり現場移動方向と泥岩の堆積図